

北新書局版『自分の畑』\*はしがき

『自分の畑』はもともと一九二三年に編集したもので、「自分の畑」十八篇、「オアシス」十五篇、雑文二十篇を含む。いま重ねて編訂を加え、「自分の畑」及び「オアシス」の二部分を残し、「茶話」二十三篇を加え、全部で五十六篇とし、相変わらず『自分の畑』と称する。挿絵五葉は「小妖精と靴作り」はそのままとしたほかは、すべて新しいのに取り替えた。元あった雑文の中で、五篇はすでに『雨の日の書』に編入し、残しておこうと思う五篇は『談虎集』に収められるはずである。一九二七年二月一日、周作人記す。

1927年2月北新書局重訂初版『自己的園地』

---

\*北新書局版『自分の畑』 これについては格好の自注がある。「『自己的園地』 広告」と題する。「『自分の畑』はもともと一九二三年七月に編集したもので、全部で「自分の畑」十八篇、「オアシス」十五篇、雑文二十篇であった。当時孫伏園君が『晨報副刊』を編集していたので、彼の手で晨報社に渡され刊行された。その社の出版部の約定のおかげで一千部出すごとに洋銀で五十元くれるということであった。印税を計算してみると、百分の八コンマ三(8.3%)で、現在まで九版、全部で四千五百部、これは慣例によって各版の実数は五百部ということである。去年の秋わたしは契約を取り消して改編自印しようと思い、手紙で言ってやったところ、返事にまだ在庫が八百余あるから、買取の用意をするようにとのことであった。あとで準備ができたので、どの程度値引きをするのかと訊くと、晨報社出版部の返事が来て、定価で譲るというのだ！おう、おう！これは笑い話なのか、それともなんのこと？だがそれ以後その社とは話をしないことにした。/ いまわたしはすでにこの本を改訂して、「自分の畑」と「オアシス」の二部分は残し、雑文は完全に除去して(残したい四、五篇は『談虎集』に収めるつもり)、「茶話」一編を加え、全部で五十六篇とし、挿絵五葉も全て換え、相変わらず『自分の畑』と称し、北新書局に託して発行してもらおう。印刷紙は特に改良し、定価は6角で据え置くので、入り用の向きはどうか北京上海の北新書局でお買い上げ願いたい。特に旧版を必要とされる方は、直接晨報社に在庫の有無を問い合わせてもらいたい。だが読者にはわたしの印章があるかどうかを確認していただきたい。晨報社発行の第五版以降の『自分の畑』には皆印章がある。どうかみなさんご注意いただきたい。一九二七年二月一日、周作人。」

これは1927年2月5日『語絲』第117期に載ったもので、文集や全集には未収の一文である。これによると晨報社版は九版までで、例えば北新版の1929年7月の「十二版」という表記は、実は晨報社版から引き続いて計算したもので、実際には重訂三版ということになる。北新版のはしがきを、わたしの『著訳編目系年目録補正』は1927年2月北新重訂版としているが、「広告」の今すぐにも出そうな口調からの類推であって、直接十版つまり重訂初版に当たって確かめたわけではない。この時期は日記を欠いており、『周作人資料』の類や『年譜』にも何の記載もなく、書誌の面での研究がまだまだであることを示している。